

中野香織

⑧ アンタッチャブルなイギリス女

齋藤敦子様。

いやあ、行ってきましたよ、デイカプリオとスコセッシの記者会見。

ラッシュ時の満員電車なみの混雑のなかで立ちっぱなしはきつかったけど、生レオの美声による美しい英語をじかに聞いたのは嬉しかった。そう、意外だったんだけど、レオはなかなかオツな英語を話すんですよ。

共演者のダニエル・ヘサブライム、デイ・ルイスを称賛した言葉なんて、うまいと思いました。“He is one of a kind.”って、‘one of a kind’って「種族においてただ一人」というか「一人しかない種族」というか、もう比べる対象が誰もいないっていうレベルの唯一無二ぶりのことですから、デイ・ルイスを評するのにぴったり。

で、この言葉、どっかで聞いたことがあるなどと思ったら「シユレック」でした。フィオナ姫に「What kind of knight are you? (あなたはいったいどんな騎士なの?)」と聞かれたシユレックの答えが、‘one of a kind.’だったんですね。「今にわかる」っていう上手な字幕がついてましたが。唯我独尊のモンスターが愛するのが「サクレ女」(特許モノのネーミングだ)のフィオナ



デイカプリオとスコセッシ



ドーバー 越えて

齋藤敦子
中野香織

カット・井上陽子

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談話が交わされる。

姫(「変身」前)ってところに震えませんか? 「サブライム男にサクレ女」という敦子さんの仮説はここにおいても成立しているわけですか(ほんとか?)。

おっと、敬愛するイギリス男が本物のモンスターにまで飛躍しちまいましたぜ。ここでちょっと頭を冷やして、イギリス女の方に目を向けてみますか。先日から(私らの間で)持ち上がっている大問題、「イギリス女にはなぜ魅力がないのか?」

この問題って実はアカデミックな「イギリス論」においてはほとんど誰も論じてないんですよ。従来の偉い学者さんたちが「これだけはお手上げ」とばかり、ことごとく避けて通った話題。アンタッチャブル。

たとえば丸谷才一さんは『男もの女もの』というエッセイ集のなかで、海老沢泰久さんが語った話として、「イギリスには美人がいないと最初思うが、半年イギリスにいると急にあれが美人に見えてくる」という内容のことを書いてはいます。でも結局は、それほど長く滞在したことの無い丸谷先生にはその魅力と美は「わからずじまひ」と逃げたりして。作家にも難問なのです。

そういえば「グレースと公爵」で描かれる「かつては愛人、今はセックス抜きのお友愛」関係って、フレンチ男と「アンタッチャブル」イギリス女という無縁ではない気がしたんですが、いかがでしょう? 無粋な身には「わからずじまひ」。